若紫

①日もいと長きにつれづれなれば、
（　Ｓ　）夕暮れのいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。

②人々は帰し給ひて、惟光の朝臣とのぞき給へば、
ただこの西面にしも、持仏据ゑ奉りて行ふ尼なりけり。

③（　Ｓ　）簾少し上げて、花奉るめり。

④中の柱に寄り居て、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読み居たる尼君、ただ人と見えず。

⑤四十余ばかりにて、いと白うあてに痩せたれど、
頬つきふくらかに、目見のほど、髪のうつくしげに削がれたる末も、なかなか、長きよりもこよなう今めかしきものかなと、（　Ｓ　）あはれに見給ふ。

⑥清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ、出で入り遊ぶ。

⑦中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。

⑧髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤く擦りなして立てり。

⑨「何ごとぞや。
童べと腹立ち給へるか。」
とて、尼君の見上げたる〔顔〕に、（　Ｓ　）少しおぼえたるところあれば、
子なめりと（　Ｓ　）見給ふ。

⑩（　Ｓ　）「雀の子を犬君が逃がしつる。
伏籠の内に籠めたりつるものを。」
とて、いと口惜しと思へり。

⑪この居たる大人、
「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるるこそ、いと心づきなけれ。
（　Ｓ　）いづ方へかまかりぬる。
いとをかしう、やうやうなりつるものを。
烏などもこそ見つくれ。」
とて立ちて行く。

⑫髪ゆるるかにいと長く、目やすき人なめり。

⑬少納言の乳母とぞ、人言ふめるは、この子の後見なるべし。

⑭尼君、
「いで、あな幼や。
言ふ効なうものし給ふかな。
おのが、かく、今日明日におぼゆる命をば、（　Ｓ　）何とも思したらで、雀慕ひ給ふほどよ。
『罪得ることぞ。』と、常に聞こゆるを、
心憂く。」
とて、「こちや。」と言へば、
（　Ｓ　）つい居たり。

⑮（　Ｓ　）頬つきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき・髪ざし、いみじううつくし。

⑯（　Ｓ　）ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまり給ふ。

⑰さるは、限りなう心を尽くし聞こゆる人にいとよう似奉れるがまもらるるなりけりと思ふにも、涙ぞ落つる。

⑱尼君、髪をかき撫でつつ、
「梳ることをうるさがり給へど、
をかしの御髪や。
いとはかなうものし給ふこそ、あはれに後ろめたけれ。
かばかりになれば、
いとかからぬ人もあるものを。
故姫君は、十ばかりにて殿に後れ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。
ただ今、おのれ見捨て奉らば、
（　Ｓ　）いかで世におはせむとすらむ。」
とて、いみじく泣くを（　Ｓ　）見給ふも、すずろに悲し。

⑲幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつ伏したるに、

こぼれかかりたる髪、艶々とめでたう見ゆ。

⑳　生ひ立たむありかも知らぬ若草を後らす露ぞ消えむ空なき

㉑また、居たる大人、「げに。」とうち泣きて、

　初草の生ひ行く末も知らぬ間にいかでか露の消えむとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都、あなたより来て、
「こなたは、あらはにや侍らむ。
今日しも、端におはしましけるかな。
この上の聖の方に、源氏の中将の、瘧病まじなひにものし給ひけるを、
（　Ｓ　）ただ今なむ聞きつけ侍る。
（　Ｓ　）いみじう忍び給ひければ、
（　Ｓ　）知り侍らで、ここに侍りながら、御訪ひにもまうでざりける。」
とのたまへば、
（　Ｓ　）「あないみじや。
いとあやしきさまを、人や見つらむ。」
とて、簾下ろしつ。

㉒（　Ｓ　）「この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。
世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂へ忘れ、齢延ぶる人の御ありさまなり。
いで、御消息聞こえむ。」
とて立つ音すれば、
（　Ｓ　）帰り給ひぬ。

㉓（　Ｓ　）あはれなる人を見つるかな、
かかれば、
この好き者どもは、かかる歩きをのみして、よく、さるまじき人をも見つくるなりけり、
たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよと、をかしう思す。

㉔さても、いとうつくしかりつる児かな、
何人ならむ、
かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばやと思ふ心、深うつきぬ。